

2歳児保育室の環境構成の変化と保育者の役割の変容 I

松延毅¹, 中村知嗣², 藤田清澄³, 本田由衣⁴, 石田淳也⁵, 松延摩也子⁶, 香曾我部琢⁷

^{1,6} 社会福祉法人浄勝会出雲崎保育園 ² 学校法人恵愛学園愛泉幼稚園, ³ 盛岡大学, ⁴ 武蔵野短期大学, ⁵ メリーポピンズ朝霞台, ⁷ 宮城教育大学教育学部家庭科教育講座

本研究では2歳児保育室における環境構成を変化させることで、保育者の環境構成に対する意識や子どもとのかかわりがどのように相互作用しながら変化していくのかを明らかにしていくことを目的とする。環境構成変更前後について保育室の様子をビデオと自然観察法によって観察し、研究 I として保育者の周囲にいる幼児の数の変化を量的に分析した。その結果、環境構成の変化前後では、保育者の周囲にいる幼児の数が 5 名以上の時間が有意に減少し、4 名以下の場合が有意に増加した。また、幼児が保育者の周囲に滞留する総時間も有意に減少した。以上の結果から、保育室の環境構成の変化が、幼児の行為に影響を与え、保育者との相互作用が減り、環境への相互作用や幼児同士の相互作用が促されたと考えられる。

キーワード: 保育者、周囲、幼児、カイ自乗検定、相互作用

1. 問題と状況

1.1 環境を構成する主体者としての保育者

及川(2014)^[1]は、遊びにおける子どもの基本動作の内、観察の中では「つまかさねる」「ころがる」などが見られなかった理由として、「動作を引き出すための環境」が無かったためと述べ、動作を引き出す環境構成の重要性を指摘している。また、山田(2011)^[2]はアクションリサーチによって子どもの絵本の読み活動を観察しながら空間設定を変化させることで、コーナーが絵本を読む場所として定着していく過程や絵本の読み方が変わっていく様子を明らかにし、保育者が環境構成を行う、実践的な手がかりを示唆している。

また、幼稚園教育要領^[3]においても「教師は幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない。」と述べられており、保育者は、より豊かな動作経験を幼児に提供したり、遊びを子どもが自発的に展開したりするために必要な環境について考え、子ども理解を基にしつつ再構成していくことが求められるのである。

1.2 環境としての保育者

平山(2013)^[4]は保育実践における保育者の役割を人的環境として、保育室や遊具などの物的環境に子どもが主体的にかかわり、自分なりの理解を積めるように援助する必要性を述べており、保育者を環境の一つとして示している。また人的環境の保育者の役割として塩路(2004)^[5]らは保育者が子どもへの多様な一人称の使い分けをすることによって、子どもと多様で柔軟な関係を結ぶことを明らかにし、子ども一人ひとりに対応することが重要な側面であることを示唆している。

保育者が人的環境として、環境の一つとして位置づけられる考えについては、柴崎ら(2009)^[6]、の保育者養成用テキストなどでも項目化されていることから理解できるように保育領域においては一般化された概念といえる。

1.3 環境から影響を受ける保育者

また、汐見(2012)^[7]らは、保育者の意識が、保育室の空間構成とその環境下における子どもの行為の変容と関連しつつ、それらが同時に変容していく過程をアクション・リサーチ的な手法で明らかにしている。村上(2009)^[8]も環境構成の変化によって保育者の見守りを増やしていることを明らかにし、子どもに対するかかわり方の変化を生み出していることを示

している。

つまり、保育者は自らが主体的に保育の環境を構成する役割を担いつつ、自らも環境の一つであり、その環境から影響を受けて自らの援助の在り方への意識を変容させ、3つの役割を果たしているのである。保育者は環境について、三重の相互作用の中でその在り方を日常的に捉え、自らの意識とともに変容させていると考えられるのである。

しかしながら、先行研究を概観すると、保育実践における環境構成に関する研究は、先に示した3つの役割ごとに研究が進められ、保育者と環境の三重の相互作用については捨象されてきた。そこで、本研究では、保育者が(1)環境を主体的に構成する役割、(2)自らの人的な環境としての役割、(3)環境と相互作用することで自らの援助を変容させる役割、以上3つの役割を担う者として捉え、保育実践における環境と保育者の相互作用について明らかにする。

2. 研究方法

2.1 方法と目的

汐見(2012)^[9]らは「アクションリサーチ的研究」と称し、保育所との共同研究を行い、保育士と話し合いながら0歳児クラスの空間構成を変化させていくことで、乳児の行動変化を調べ、保育者の環境構成に関する意識の変容にも迫っていった。

そこで本研究ではこの研究方法を参考にして、保育者と話し合いながら保育室の環境構成における問題意識を捉え、環境構成を変更していった。そこから変更前と変更後の(1)保育者の人的な環境としての役割、(2)環境が変わったことで保育者の直接的な援助がどのように変化したのか、(3)環境を主体的に構成する役割についての意識の変容を明らかにしていく。そこで本研究では、保育者の周りにいる子どもの数を変更前と後で比べることによって、環境構成の変化が人的環境としての保育者に与える影響を量的に明らかにする。

2.2 観察期間と記録の方法

2015年7月13日～7月14日の二日間実施した。対象とする時間帯は幼児が当園してくる8:30頃から

10:00までの自由遊びの時間とした。2歳児クラス保育室に定点カメラを2台設置して、自由遊びの様子を捉えた。また観察者も同時に保育室の中に入り自然観察法で観察を行った。

2.3 対象園と年齢について

本研究ではA幼稚園2歳児クラスを対象にした。2歳児は象徴機能の発達と共に簡単なごっこ遊びをするようになり、外界へと積極的に働きかけていく。一方で自我の育ちを受け止めてくれる保育者との信頼関係を形成し、時には保育者の行動をモデルとして自分の世界に取り込んでいく。このような発達段階を考慮すると、2歳児は人的環境としての保育者とのかかわりや保育者が用意する環境構成へのかかわりに影響を受けやすいと思われる。そのため2歳児を対象とすることで本研究の課題に迫ることができると考えた。

2歳時クラスの保育室の位置と構造は図1、図2の通りである。保育室は玄関から奥にあるため玄関から歩く距離は長いが、奥まっていることで、静かで落ち着いた環境になっている。また保育室の構造は縦長の長方形であり、ドアから保育室に入ってすぐ右に円柱の柱が立っている。

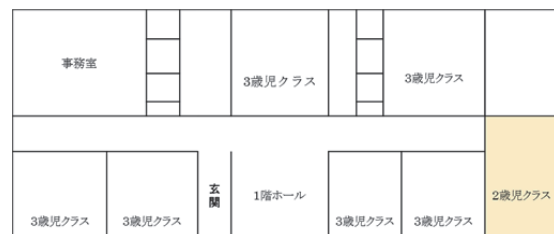


図1 2歳児クラス保育室の位置

2.4 2歳児保育室の環境構成とその変化について

A幼稚園はこれまで一斉活動を大切にしていた保育を行っており、保育室も一斉活動が展開しやすいよう片付け後には広いスペースが確保できるように環境に配慮していた。図3は2歳児クラスにおける変更前の図である。ロッカーは壁側にあり、それぞれの遊びコーナーに仕切りがなく入り口から奥まで見通せるようになっている。

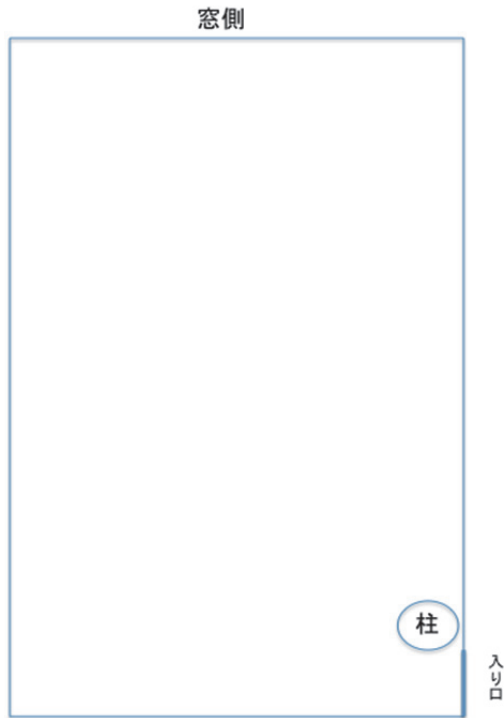


図2 保育室の構造

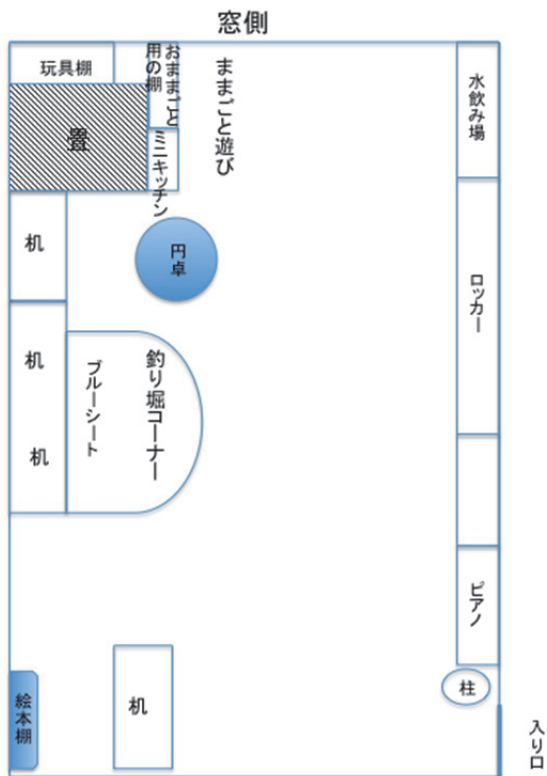


図3 環境構成変更前

また遊びのコーナーが片側に偏っている為、遊びの

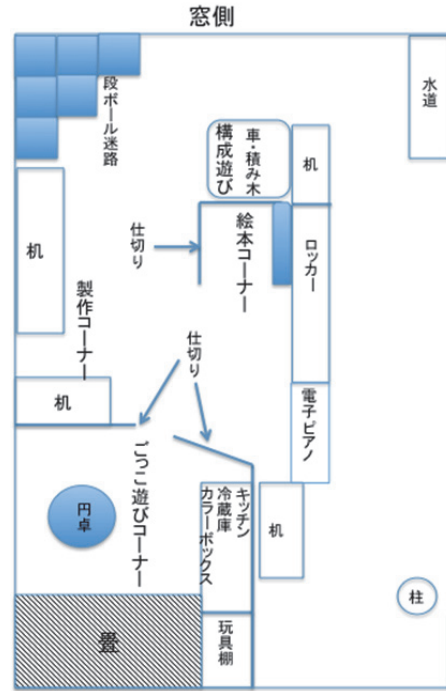


図4 環境構成変更後

移動をする子ども同士や支度をする子どもの中で動線がぶつかりやすくなっていた。1日目の観察後、担任、副担任との協議を基に保育室の環境構成を変容させる提案をした。変更後の環境構成が図4である。

まず壁側に配置されていた幼児のロッカー棚を移動して、生活と遊びの空間を分けるように配置した。また、ままごとコーナーを窓側から反対の入り口側に移動した。仕切りを高く設置し、カラーボックスで造られたキッチンと本物の調理器具やフライパンを揃えた。そしてままごとコーナーを向くように机を置いて製作コーナーとした。絵本コーナーは変更前にはなかったが、新たに仕切りをつけて落ち着ける空間にして絵本コーナーを設置した。窓際には動き回れる遊びのスペースとして段ボール迷路と車遊び、構成遊びを設置した。これによって一つ一つの遊び空間が緩やかに仕切られた遊びのコーナーが設置された。

2.5 分析の手続き

新潟県内のA幼稚園の2歳児クラスの遊びの様子をビデオで録画し、その映像データをもとに遊び時間内に保育者の周囲に集まる子どもの人数と累計時間を人数ごとに集計した。集計には荒川(2008)^[10]のSigsajj2を使用した。対象は2歳児クラス担任のA保育者とし、A保育者が映像から外れている時間は対

象外とした。集計した人数ごとの累計時間は小数点以下を切り捨てたのち、統計処理を行い、それらを基に保育環境の変更の前後における子どもと保育者の関係について考察した。統計処理には統計分析プログラム JavaScript-STAR 2012 release 2.0.7j を使用した。

3. 結果と考察

表1は保育環境の変更前後の保育者の周囲に集まる人数ごとの累計時間を集計したものである。 χ^2

表1 保育者の周囲の子どもの数と累計時間

周囲の幼児数	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人	合計
変化前	45	134	388	550	638	772	766	520	237	127	62	4239
変化後	119	297	400	310	438	315	103	46	3	0	0	2031

表2-1 残差分析の結果(上段調整された残差、下段検定結果)

周囲幼児数	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人
変化後	11.1**	16.8**	11.8**	2.5*	6.4**	-2.7**	-13.9**	-12.9**	-10.5**	-7.9**	-6.4**

*p<.05, **p<.01

表2-2 実測値の残差分析の結果

周囲幼児数	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人
変化後	▲	▲*	▲	▲	▲	▽	▽	▽	▽	▽	▽

変更後は0人～4人まで集まることが有意に多いことが明らかになった。この結果から、保育環境の変更によって保育者の周囲に集まる子どもが少なくなったことが窺える。

4. 総合考察

4.1 保育者の周囲にいる子どもの数・時間の減少

本研究の知見として、2歳児の保育室の環境の変化によって、保育者の周囲にいる子どもの数が環境変化の前が、5名以上が多かったのに対して、変化後には4名以下に減っていることが示唆された。これは、単純に環境の変化によって、生み出された遊びの空間に子どもが滞留することによって、保育者の周りに来る幼児の数が減ったことと考えられる。

環境構成の変更前は、登園してきた子どもたちが身支度をするロッカーなどが、遊びコーナーと正対

検定の結果、保育環境の変更によって保育者の周囲に集まる子どもたちの数と累計時間は変更前と変更後で有意に差があることが明らかとなった。クラメールの連関係数を用いて効果量を算出したところ、保育環境の変更は保育者の周囲に集まる子どもの数に対してやや大きめの効果があることが明らかとなった。(x²(10)=1066.094, p<.01 Cramer's V = 0.412)さらに残差分析を行った結果、表2-1と表2-2に見られるように、保育環境変更前は保育者の周囲に5人～10人まで集まることが有意に多くみられ、

するような配置となり、また遊びコーナーもそれぞれが並列に配置され、それらを物理的に区切るような構成がなされていなかった。そのため、子どもたちにとっては、どこにいても保育室全体が見通せるような状況であり、互いに遊んでいる子どもの姿や保育者の姿が視界に入ることが予想される。そのため、子どもたちは自分の遊びをしつつもそれらに集中して遊び込んでいくのではなく、他者の遊び環境に刺激を受けてしまったり保育者の存在を常に意識してしまったりするため、一つの遊びに集中せず、遊びを転々としていく中で、次第に保育者のそばに集まってしまうことが多くなったと考えられる。加えて2歳という年齢の発達段階を考慮すると保育者の存在を求めながら生活していく時期でもあるため、自分の遊びに対する社会的参照を得ることや、遊びのモデル的存在として保育者のそばに集まることも考えられ、結果として保育者のそばに子どもが多く集まっ

たと考えられる。

また観察された映像の中では保育者が集まってきた子どもたちに対して壁面に貼られた名札などを使って話をする場面などがあり、環境構成変更前の保育室の環境は保育者にとっては子どもが集めやすい環境と考えることもできる。つまり変更前の環境は子どもたちにとっては保育者のそばに集まりやすく、保育者にとっては子どもを集めやすい環境と考えることができる。

一方で環境構成変更後では、ロッカーや帳面台など支度などをする生活空間と遊びの空間を分け、子どもたちの動線を意識した環境構成にしたことで、子どもたちは支度後に遊びに向かう行動が環境から促され、保育者の援助も空間によってその目的が明確になることから、身支度などの生活行動への援助と遊びへの援助を求める子どもが分散したことで人数の減少が見られたと考えられる。

また遊びのコーナーも高さのある仕切りなどを用いて、子どもたちの視線をぶつからないように区切っていくように構成することや遊びの静と動のバランスを考慮しながら配置することで、子どもたちは自分の興味をもった遊びに他の遊びからの干渉を受けずに取り組むことが可能になったため、一つ一つのコーナーに留まる時間が長くなり、環境構成変更前に比べて主体的に遊びに取り組んだ結果、保育者のそばに集まる人数と時間が減少したと考えられる。

さらに子どもたちが自分の遊びに集中することで保育者もそれぞれの遊びに対する援助が明確となり、自分たちの遊びを認めてほしい子どもたちに対して、その空間において言葉を掛けたり、一緒に遊びに参加したりしてかかわることができるほか、直接的な援助と間接的な援助を使い分けることができたのではないかと考えられ、その結果、保育者のそばに遊びやかかわりへの直接的援助を求める子どもが減少したのではないかと考えられる。

4.2 保育者の周囲の子どもの減少と保育者の援助

表1は保育者の周囲の子どもの時間の数とその滞留時間を累計した時間を示しているが、合計の滞留時間そのものが少なくなったことから、2歳児が保育室の環境変化に応じて、保育者のそばにいるよりも、変化した環境の中で主体的な活動を展開していることが明らかである。保育者のそばを離れ、遊びに取り組むことで環境構成の変更前に、見られていた

保育者と子どもとの相互の関係性ではなく、同じ遊びをする子ども同士の関係性の発展が促されることも考えられる。

また保育者の周囲の数が0人となっている時間が増加していることから保育者は直接的な援助ではなく子どもたちを見守ったり、環境の再構成を行ったりするなどの間接的な援助の時間をとることにつながっていると考えられ、保育者は人的環境的な役割から、環境を主体的に構成する役割を担う中で環境から影響を受けて自らの援助を変化させることにつながっていると考えられる。また保育者の周囲の子どもの数が減少したことで保育者は子どもたちの遊びや育ちの姿をよりの確に取られることが可能になると考え、子どもたちに対しての援助の質、保育の質の向上につながっていくと考えることができる。

4.3 今後の課題

本研究では、2歳児の保育室の変化が保育者の周りにいる子どもの数や時間の減少を生み出していることを明らかにした。しかしながら、保育者の周囲の子どもの数や時間の減少と保育者の具体的な援助の在り方の様相については明らかにされていない。そこで次の研究では、保育者の周りにいる子どもの数の急激な変化に着目して、その変化がなぜ立ち現れたのかを明らかにし、保育室の環境のあり方について検討を行いたい。

5. 引用文献

- [1] 及川直樹: 幼児の遊びの中で発現する基本動作の実態と関連要因の検討: 一地域子育て支援拠点を利用する親子を対象に一, 教育発達研究, 62巻, pp.44-55, (2014).
- [2] 山田恵美: 保育における空間構成と活動の発展的相互作用—アクションリサーチによる絵本コーナーの検討—, 保育学研究, 49巻, pp.260-268, (2011).
- [3] 文部科学省(2008)幼稚園教育要領解説. フレーベル館
- [4] 平山許江: 領域研究の現在<環境> 幼児教育知の探究 17, pp101-103, 萌文書林(2013).
- [5] 塩路晶子他: 保育者の中の3つの「わたし」—子どもたちとの豊かな関係性を築くために—, 保育学研究, 42巻, pp.12-18, (2004).

- [6] 柴崎正行他:保育内容「環境」(最新保育講座),pp.25-38,ミネルヴァ書房(2009).
- [7] 汐見稔幸他:乳児保育室の空間構成と“子どもの行為及び保育者の意識“の変容,保育学研究,50 卷,pp.298-308,(2012).
- [8] 村上博文:乳児保育の環境条件と子どもの変化—保育室の空間構成に関するアクションリサーチ(自由遊びの時間)—,ベビーサイエンス,9号,pp.46-63,(2009).
- [9] 前掲[7] pp.21-31,(2009).
- [10] 荒川歩:マルチチャンネル行動測定ソフトウェア(sigsaji)の開発,対人社会心理学研究,8,pp.111-114,(2008).